

令和7年度 嘉手納町教育課程特例校（英会話）事業報告 ～屋良小学校～

1 趣旨

嘉手納町教育委員会では、「進取の気象・国際性に富み社会に貢献できる人材の育成と生涯学習の振興」を目標に、「人間力豊かで、世界にはばたく人材を育むまちかでな」の実現に向け、国際化・高度情報化など社会の変化に対応できるよう国際理解教育や情報教育を推進している。平成21年11月9日付け、教育課程特例校の指定を受け「英会話科」を新設し、小中一貫した系統的な英語教育を行うことで、国際理解・実践的英語力（コミュニケーション能力）を育むことを目的として本事業を実施した。

2020年の学習指導要領の改訂により、小学校3・4年生では「外国語活動」として英語が必修化され、主に「聞く・話す（やり取り・発表）」の「2技能3領域」を学習することになり、活動型学習をメインとした、英語に慣れ親しむことを重視したカリキュラムが実施されることとなった。また、小学校5年生からは、英語が「外国語」として正式科目になり、「4技能5領域」を学習していくこととなった。小学校4年生までの「聞く・話す」という発声のコミュニケーションのほかに、「読む・書く」という内容が加わり、既習の基本的なコミュニケーション能力を向上させることを目指している。このように、本町の目指す、「早期から英語に慣れ親しむ」、「実用的な英語力の取得」が教育課程へ位置づけられたことにより、令和2年度に教育課程特例校の「英会話科」の実施を小学校1,2年生のみと変更した。

2 基本方針・目標

本町は、東洋最大の嘉手納基地を抱え、外国人も在住し、町役場への来庁者への対応等、外国人と日常的に接する機会も多く、町としても英語が話せる町民を必要としている。また、町内の学校では、今後、基地内の中学校との交流・海外ホームステイ事業も期待される。あいさつや自己紹介など日常的な英会話も含め、我が町の歴史・文化の紹介を手始めに、我が国の紹介などグローバルな視点から異文化理解を醸成する国際理解教育の推進、英語が使える日本人の育成を図るうえからも、今後益々、実践的な英会話力の育成が必要である。そこで、以下の方針・目標を定め事業推進の充実を図った。

(1) 基本方針

各学年、児童の特性に配慮した計画に基づき、早期から英語に慣れ親しませるため小学校1,2年生において英会話活動を実施する。模倣の活動を好み、繰り返し練習をするパターンプラクティスも喜んで受け入れるこの時期には、身振り、手振りや英語のリズムに合わせて体を動かしたり、歌やチャンツを覚えたり、楽しいゲームをしながら「英語を使う場」を効果的に設定していくようにする。

(2) 目標

- ① 英会話に興味・関心をもち、英語に親しむ。
- ② 英語を活用して自分の思いを伝えたり、英語を聞いて相手の考えを理解したりする。
- ③ 英会話の学習を通して、異なる文化に興味・関心をもつ。

<活動目標>

身近な英単語を使っての歌や遊びなどの活動を通して、英語を楽しむ。

3 英会話活動における基本的指導内容

- ・歌やゲームなどを通して、英語の発音やリズムに親しむことができる。
- ・簡単な日常のあいさつができる。
- ・1～20までの数の数え方を言うことができる。
- ・身体の各部や色、曜日、動物、果物、野菜、形などの身近なものの英単語を言うことができる。
- ・英会話体操や歌、ゲームが楽しくできる。

4 教育課程

(1) 小学校教育課程編成表（令和7年度）

		第1学年	第2学年
各 教 科	国語	306	315
	社会		
	算数	136	175
	理科		
	生活	92(-10)	95(-10)
	音楽	63(-5)	65(-5)
	図画工作	63(-5)	65(-5)
	家庭		
	体育	97(-5)	100(-5)
道徳		34	35
外国語活動			
外国語			
総合的な学習の時間			
英会話科		25	25
特別活動		34	35
総授業時数		850	910

※時数を確保するにあたり、生活科、音楽、図画工作、体育から充当する。

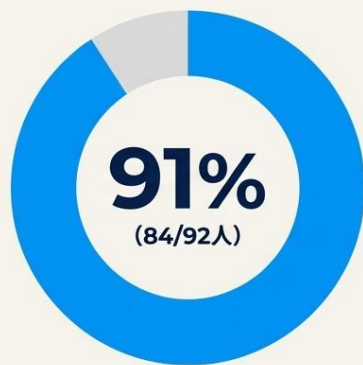
(2) 「英会話科」の評価 (外国語活動、外国語との関連を考慮)

	各学年の英会話科 評価のポイント	コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	外国語への 慣れ親しみ	言語や文化に 関する気付き
小学校低学年	積極的な参加	簡単なあいさつ	英語の歌・ゲーム	英語の発音

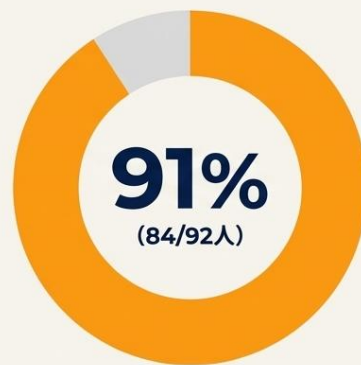
5 諸調査の結果

令和7年度 児童への英会話アンケート調査の結果【目標に対するアンケートの結果】

Data Insight 1: 圧倒的な「学習意欲」と「自信」の獲得



「英会話の授業は好きですか」に対する
「はい」の割合



「簡単な英語であいさつができますか」
に対する「はい」の割合

1年生(30名)・2年生(42名)の全4クラス合計データ。

【分析】小1・2年生という早期導入が、「英語へのポジティブな感情(好き)」と「基礎的な成功体験(挨拶ができる)」を確実にもたらしめている。外国語学習における最大の障壁である「苦手意識」を完全に払拭することに成功。

Data Insight 2: 応用力への芽生えと、学年ごとの心理的変容

■ 1年生 ■ 2年生



日常への波及

授業内の楽しさが、家庭での自発的な発話や異文化への興味という「次のステップ」へ繋がっている。

2年生特有の「照れ」

データが示す通り、2年生になると自我の発達に伴い「恥ずかしさ」が芽生え始める。これは成長の証であり、だからこそ「小1からの自己表現の習慣化」と「失敗を恐れない心理的安全性のある教室づくり」が極めて重要である。

6 考察と今後の課題

【英語に対する親和性の形成状況】

「あいさつ（問3）」の達成度が全体で91%と非常に高いことは、特筆すべき成果であるといえる。これは、低学年期における「パターンプラクティス」や「あいさつの習慣化」が、言語行動として確実に定着していることを表している。

低学年からの英会話学習により、英語を「学問」としてではなく、日常的な「ツール」として自然に受け入れている様子が伺える。

【コミュニケーションへの心理的障壁の検証】

「はずかしがらずに話そうとしているか（問2）」という項目については、1年生（平均78%）に比べ、2年生（平均57%）では肯定的な回答が大きく低下している。

発達段階において他者の目を意識し始める時期と重なるため「間違えたらどうしよう」という羞恥心が芽生え始めるこの時期に、いかに「失敗しても大丈夫」といった安心して挑戦できる環境づくりが、指導上の重要な焦点となる。

【教室内の学びから実生活での活用への転換】

「家庭での使用（問6）」や「海外の文化への関心（問5）」の項目については、クラス間でばらつきが見られた。今後は、「生きた英語」に触れられる環境において、児童がそれを自分事として捉え、知的好奇心を広げるための「接続」についてしっかり捉え、学校内での楽しさを、いかに学校外への関心へと昇華させるかが、今後の戦略的課題であると考えられる。